

安樂寺本系北野天神縁起の性格

小 仲 透

はじめに、研究史の概略を追いながら北野天神縁起諸本の中の安樂寺本系の位置を確認しておくこととする。

天神縁起には、その冒頭の部分によって、「甲・乙・丙」の三分類が、梅津次郎氏によって早くに定着し、その分類のもとに、相互の系統論や各諸本ごとの個別研究がなされてきた（安樂寺本系との対比を明確にするために、以後この三分類に属する諸本を総称して「縁起」と呼ぶ）。またこの「縁起」に対して、それとは全く性質の違う、いわば異本の立場にたつ伝本群が確認され、それらは『統群書類従』に「……鎮西安樂寺本云々」と末尾にある一本が収められたために、「安樂寺本」と、またそれと共通する特徴を有する諸本は「安樂寺本系統」と呼ばれて研究対象となってきた。

ただ、その呼称の、必ずしも妥当と言いがたい理由として一例をあげれば、一群の伝本について我々が「安樂寺本系」とそれを呼ぶ時、その名称が内容にまで関わるものを聞く者に想起させる恐れがある。具体的に言えば、安樂寺本系諸本が、安樂寺太宰府天満宮と深く関わって成った系統の伝本であるかの誤解を招く恐れがあるが、安樂寺本系諸本と太宰府安樂寺との間には、少くともその詞章に関する限り、なら近づき関係を今のところ認めることはできないのである。太宰府天満宮が自社に独自の縁起を持つようになる例としては、近年田辺美智子氏が紹介された元禄六年の伝本が注目されるが、安樂寺本系にあつては、まだ太宰府安樂寺への密着はみられない。したがって「安樂寺本系」という呼称はあくまでも便宜的なものであり、本稿でもそれを用いるものの、これから言及しようとするその成立と機能の問題も、太宰府ではなく、京都北野社とその周辺にもつばら求められなければならない。

安楽本系の諸本の外面的特徴については、先学の研究の成果から次のように整理できるかと思う。

①「縁起」が、甲類承久本根本縁起以降、多く、絵をとまない、絵巻の体裁をとって作られたのに対し、基本的に絵をとまない伝本である。

②「縁起」に比した場合、その記述に著しい増補がみとめられる。

③「天神の本地」など、後の御伽草子へと通じる詞章をもち、その祖本と推定される。

本稿では特に②が中心の問題となる。

京都北野社の内部にあつて、「縁起」と安楽寺本系諸本がどのようなに関わりあつたかを伝える資料は決して多くはない。『北野誌』に収められている「北野縁起聞書」（以下「聞書」と略す）は、北野天神縁起に対する注釈書とでも言うべきものであるが、その中に、「縁起」の甲類本のものと思われる詞章を引いてそれに注するに、安楽寺本系の本文をあてている場合がみられる。以下に該個所の全文を引けば、

鴨河の水去のきて 法性房已ニ参ントシ給フ、下人ドモ申シケルハ、加様ノ大水ニイカゞ車ヲヤルベキト云、僧正云、何條努々不可恐、有驗ノ僧トシテ水火刀兵等ノ難ヲ恐事無トテ出給フ、下人腹立テ、有驗モ時ニコソヨレ、昔釈迦如来、法輪長者ノ米洗テ捨タル白水ニオシナガサレ、僧伽梨衣ノ袖ヲシボリ給フ者ヲヤト云、法験正テ水ノキテ西岸ニ付給

フ、其時僧正ノ童笑云、鳳凰ノ翅ニヨル虻蚊ハ、量ザルニ千里ノ空ヲ飛ビ、和尚ノ供スル童ハ、思ハザルニ大海ノ底ニミナクドリスト云々

である。引用箇所は、後述する「法性房尊意渡河」の段である。

「聞書」の引用の方法は、安楽寺本系をそのままではなく、抄出する形であるが、「聞書」の筆者が安楽寺本系の伝本を手元に置いて、またはそれに親しく接することのできる立場にあつて、この注をなしたことは動かないであろう（該個所の安楽寺本系本文については、次節に引いた統群書類従所収本文を参照されたい）。また「聞書」には「他本序……」と記して『神道集』の序文を引いている箇所もあり、この三本間の近接関係をうかがい知ることが出来る。そもそも「聞書」という表題自体が、その前提としての唱導活動の存在を暗示するのである。ともあれ京都北野社またはその周辺にあつて、「縁起」と安楽寺本系が並存していたであろうことを「聞書」から知ることが出来る。

さらに、「縁起」と安楽寺本系との関係については、村上學氏が精緻な系統論を展開され、現存する天神縁起としては最古本の建久本とその後に続く建保本から、「根本縁起」などと称される国宝絵巻承久本と、安楽寺本系とが分かれたこと、安楽寺本系の本文がきわめて唱導色の濃いものであることを論じられたのであつた。本稿は村上氏の成果に学びながら、前記②の問題を中心に、安楽寺本系の増補がどのような事情によつて行われてくるかを考究し、それによつて安楽寺本系諸本の性格をい多少し明らかにし

ようにする試みである。

(原則として「縁起」の本文としては「岩波思想大系」所収の建久本を、安楽寺本系の本文としては『統群書類従』所収本を、特にことわらない限り、それぞれ用いることとする。最も参照しやすい本文であるという理由からであり、それ以外の意図はない。)

一一

天神縁起の研究史の中で常に問題となってきた点がふたつある。

北野社の縁起、としての視点に立つ時、そこには直接北野社とは関わらない要素の混入が認められるのである。既に幾度も指摘されていることだが、いま一度確認すれば、

①北野天神菅原道真に対して、撰関家の守護を強く要請すること。

②天台宗の法力のめでたさを、ことさらに強調しようとすること。

の二点である。これらは、菅原道真の生い立ちからその栄華、太宰府での客死から天神となり北野に鎮座するまでの経緯、そしてその靈験あらたかであることを語る神社縁起本来の目図とは直接関係の無い「挾雜的部分」と呼ばれてきた。なぜ、そのような要素が天神縁起の中に入り込むのかは、まだ明らかにされていると

は言えない。

北野社の公式の縁起定型からは、はみ出したこの部分は、付加的な部分とみなすことができる。それは縁起に対する要求によって変化する部分であり、その変化をうながす要求は、縁起を作る北野社の側であれ、縁起を聴聞する北野信仰の徒の側であれ、その置かれた時代思潮と無縁ではありえないだろう。そしてこのような「可変部分」について、どのような扱いをとるかによって、その天神縁起のもつ性格も大きく規定されることになるのである。「縁起」と安楽寺本系との性格の違いは、まさしくその点に見出すことができるのである。

以下、この部分における安楽寺本系の増補の問題を、両者を比較しながら見てゆくことにする。

はじめに、天神縁起と撰関家との問題。天神縁起が撰関家とのつながりを如実に示す個所として、しばしば引かれるのは、「縁起」であれば次のような部分である。^⑧

かの御政のけふまで繁昌して、撰籙もたゆることなく、皇胤もつゞぎ給へるは、九条殿の信心のちから、天満天神の御恵なりとこそはおぼゆれ。菅丞相の鎮西へくだり給ひける時、貞信公は本院の御おとくにて、右大弁にてましましき。さらに子の上の謀計にともなはず、菅丞相と心を一にて、たがひに消息をかよはして、へだつこゝろましまさず。このゆゑに貞信公とはねんごろに契をむすびて、ことに御一家をまもりさいはへ給へば、家門に撰政たえずして、天下をば心にまか

せ給たれ。

九条殿藤原師輔の北野社殿造営と、その折の祭文を載せるにはじまり、続いてその父貞信公忠平が、彼の兄時平の謀り事とは無関係であり、天神は九条家の守護たるべき事を述べたてるこの部分は、安楽寺本系の諸本には全くみられない個所である。そもそも、「縁起」成立時の建久本においてこの部分が本文にとりこまれた理由を考える時、その説明は北野社の側の事情からだけでは充分につかない。前にふれた祭文の作られた時、天徳三年（九五九）前後という時期に、貞信公藤原忠平およびその子、九条右丞相師輔の置かれた立場を推しはかるならば、彼らは他の誰よりもまず、第一に道真の荒ぶる御霊を鎮撫し、その災厄を免れる手だてを構はるる必要に迫られた当事者の人間であったと見ることができよう。大鏡の時平伝にもあるように、道真配流の素因、すなわち道真が怨霊となる素因を作ったとみなされていた時平の一族に連なる者として、外に向けても、また自らに対しても、道真の怨霊を鎮め、それを崇敬して、まつることは、彼らにとつて一門の存亡に関わる一大関心事であつたろう。さらにまた、その理由を加うるに、延長八年（九三九）には、忠平が、その父基経の没後空白が続いていた撰関職に、再び就いたのであるが、その年は同時に、北野信仰史の上から言えば、六月二十六日清凉殿に落雷があり、道真が御霊と化したことが顕在化し、京の人々の心中に強く焼きつけられた年でもある。師輔が祭文の中に記した、

男女の子孫品々に、男をば国家の棟梁として、万機撰録を意

に任、及太子の祖と成し、女をば国母皇后帝王の母たり。という文章は、このような政治的事情を背景として考えると、彼、自が地位と一門の安泰への希求が強く読み取れるであろうし、それは、天神を恐れる心理と表裏をなすものでもある。

「縁起」が、その成立に際して、二百数十年を経てこの部分を本文の中に取り込んだことは、忠平・師輔と同質の危機意識、つまり一門存亡の不安が、この時期撰関家に再び繰り返してきためとみるのが最も妥当ではないか。承久本根本縁起の製作に、慈門がどれほど関与していたかの問題についての議論は、未だ決定的な見解をみていないが、承久本の未完の問題をも含めて、その両者の関係を全く否定しざるは難しいであろう。その承久本以前、天神縁起成立の初期の建久本において、既に九条撰関家側の、承久の乱を前にした危機意識の表出を、さかのぼってこの部分に読み取るうとするのは、承久本の本文が、ほとんど異同なく建久本に依っているためだけではない。承久の乱以後に作られた天神縁起として正嘉本、弘安本を梅津次郎、近藤喜博両氏が紹介し、検討されたが、両本においてそのいずれもが、この部分を簡略縮小している傾向を見落としてはなるまい。いま正嘉本の該個所をひけば、

天徳三年^己九条（の）右大臣師輔公舎屋をつくり寶物を備へ給けり祭文ありけり此故に九條殿の御末は今に撰録たゆることなく皇胤も打つき給へり右丞相の信力天満天神の御めくみなるへし

となっていて、承久本までのこの部分の詞章と較べれば、祭文を欠くのをはじめその縮小簡略化の傾向は明らかである。このことは、承久の乱以降の状況にあって、撰閲家もはやこの部分を、積極的に天神縁起の中で説く必要の薄れていたことを、正嘉本、弘安本は示しているのである。

承久本根本縁起を、自家の存続を願う一種の誓願経として慈門の手になった、と明確に規定したのは笠井昌昭氏である。私は建久本の縁起本文成立の段階まで、九条撰閲家との関わりをさかのぼれると考える。少くとも、建久本の本文が、北野社と撰閲家との強い結びつきを希求する両者の意向の中で作成されたことは推測できるのであろう。

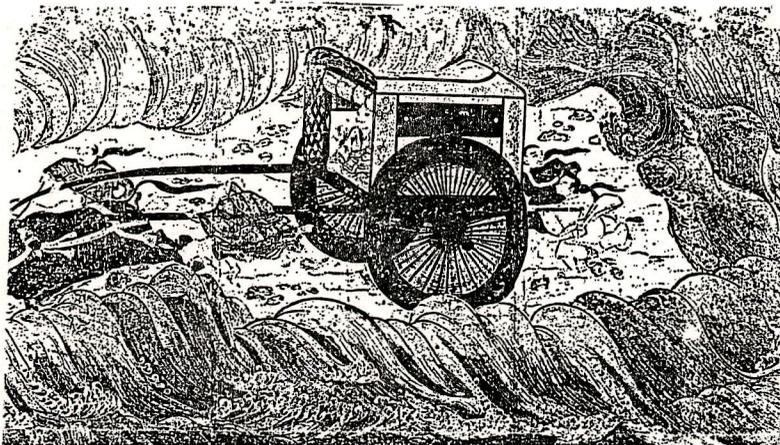
さて、安楽寺本系天神縁起には、この部分が全く欠けていることは、先述した通りである。しかし、安楽寺本系諸本における欠除の問題と、前にあげた正嘉本、弘安本での簡略化の問題とは、意味あいを異にしているのであり、同列には論じられない。この欠除の問題は、安楽寺本系の本文が「縁起」のそれとは異なる意図のもとに作られたことを示すものであろう。

そのことは、本節冒頭にあげたもうひとつの「扶雜的要素」天台宗の法力を強調することと一対をなして安楽寺本系縁起に現われている。代表的な例が、先節「聞書」の部分でふれた「法性房尊意鴨河渡河」の段における安楽寺本系の大幅な増補である。

この一段は天台座主法性房尊意が、雷鳴におののく内裏から三

安楽寺本系北野天神縁起の性格

法性坊尊意鴨河渡河の図（承久本）



『日本絵巻物大成』21. (中央公論社) より。

度の宣旨を受け、それに応えて山を降り参内する際、洪水のあふれる鴨河を、水に濡れることなく渡り切る、高僧の靈験譚である。建久本では、この個所を次にあげるような簡単な記述のみで済ませている。また承久本で絵巻化される際、この段の直後には、写実的で詳細な絵が付与されることになる。(承久本での詞章と絵との関係は、建久本の詞章をもとに絵の作者がその具象化を試みたものと推せられるが、詞章から絵への展開の幅は非常に大きなものがあり、既にこの説話が、後にあげる安楽寺本系のよりに増幅した形で流布していた可能性をうかがわせる。)

其間に贈僧正、三度の宣下を蒙りて、比えの山より北關にまゝり給ひしに、鴨河の洪水さりのきて、陸地のごとくにとほり給ひしぞ、法験も目出たく、皇威もおそろしき。その後こそしばし天神をばなだめ奉り給ひける。(建久本)

この部分に対応する安楽寺本系の本文としていささか長文になるが、統群書類従本から該箇所を引くと次のようになる。

僧正既西坂本下。内裏參給。如御車飛。自馭麟猶早。但賀茂河水不唾漲出。漫々似蒼海。巫峽三峡掉。雖船筏非可越人間。電雷震自百千萬數魁。黑雲空无塞。東西兩岸木梢不分見。如雨車軸。如瀧水落。為一助無事不翌鳥。増凡夫境界不可思寄。此由御供人々惶為申。僧正宣。汝等勿事々恐。有驗僧犯水火刀兵等難有事乎。只無憚車可望洪水被仰。牛飼并御共人々。心中思在。哀不嘉有驗可依様。昔尺迦如来者。實林長者光洗捨白水被押流。僧加梨衣御袂泮。況此程大洪水。車

通可有驗不覺。只今度之雷。御祈不可叶事思食。此河投御身失給悲。各皆思合。類僧正只遣車諫給間。牛飼既追懸洪水。車輪既河澄程成。水神計于。洪水上下去車一兩通計。如洞透。河底深。牛膝立。空見大海也。弓手馬手見。洪水如立屏風。自兩岸見之御牛車御共人々潛失給覺。緯無事故。西岸御車上。轅取付人々安堵悅。其中触事口嘯物申中童子一人侍。貌事柄勝同輩。然間御糸惜深在切物。此童西岸何嘯事在。鳳凰翅付蚊虻者。不量飛於千里雲。和尚御供我等者。不慮於大海底。

このように安楽寺本系ではこの段が、著しく増補され、描写も詳細にわたり、時の天台座主法性房尊意の法験のめてたさ(ひいては天台宗の法力の有難さということになる)が強調されることになる。またその描写も、例えば承久本の絵と比しても、水中にできた空洞の中を牛車がぐぐり抜ける、としたり、侍童の側の視点を取り入れてみたりと、実に多彩であり、単に詳述するということ元を越えていることがわかる。

尊意は、前述の忠平、師輔父子が道真の怨霊を積極的にまつらねばならぬ立場にあったと推されるのに対し、縁起本文の中で直接道真の怨霊と対峙し、その怒りを鎮める役割を担わされていることを、まず確認しなければならぬ。天神縁起の基本的な構造は、

①道真の出生から榮華をきわめるまで。

②太宰府配流後の苦難の日々と、死して御霊となり、都にとつて

返して災厄をなすまで。

③北野に鎮座し、社殿等の整うまで。

④天神の様々な靈験奇特を記し、信心を勧めめる部分。

の四部から成るが、そのちょうど中間点、荒ぶる御霊を、利生厚き神へと転換させる役割を尊意は負わされているのである。建久本では尊意の扱いは、天神の荒ぶる神威にまどう人々の中のひとりとして、あげられているかの印象を与えるが、「しばし天神をばなだめ」ることができたのは、彼だけであるとするのが、そのなによりの証左であろう。

では、なぜ尊意にその役割が集約されて付与されることになるのか。建久本からうかがわれるその理由は、まずなによりも彼が当時の天台座主であったこと、そして尊意と道真とが「年来の師壇の契り」を結んでいたことである。だが、尊意という人物の周辺を詳しく検討すれば、それ以上の理由が存在することが知られるのである。

尊意の経歴を伝える資料は多くはない。『天台座主記』『日本高僧伝要文抄』等の史書に記事が散見され、また道真との関わりについては『日本紀略』を初めとして『元享積書』にその経歴がまとまった形で収められている。説話集では、『三宝絵詞』『後往生伝』等に、彼に関する説話が載るが、尊意についての最も詳細な記録は『尊意贈僧正伝』（以下『尊意伝』と略す）である。

彼の死後ほど遠くない時期に、彼に近侍した弟子達の手になったと想定されているこの編年体の記録を、前節までふたつの視点に

拠って追いかけると、まず明確になるのは、彼が当時の九条家と強い関係をもった人物であるということである。

延長元（九二二）年、同四（九二六）年の二度にわたって、尊意は中宮御産の平安を祈る修法を行なっている。この時の中宮とは、時平、忠平の兄弟である穩子（醍醐后）であり、初めの御産で生まれたのは寛明親王―延長八（九三〇）年、延喜帝醍醐天皇の後を襲って朱雀帝となる人物であり、二度目の御産で生まれたのは成明親王―後の村上帝となる人物である。忠平が摂政となつたのは、この朱雀帝の即位に伴つてのことであるから、ここにおいて忠平、師輔父子と尊意との間には、具体的に連動する関係が出現することとなる。

次に、尊意と道真との関係にふれる。天神縁起において、道真の御霊を鎮め、善神へ転化させるためとはいえ、道真の怨霊が尊意によって調伏される構図を縁起の中でとることは、北野社の側にとっては必ずしも受け入れやすいことではない。したがって、この構図を縁起の中で存在させるについては、両者に何らかの共通項を認めることが、不可欠の条件となろう。建久本の「年来の師壇の契り」云々は、そのつじつまを合わせるためにも必要な仕掛けであったのだが、『尊意伝』と照合して、さらに両者により深い共通項を見ることが可能である。

尊意はその出生から臨終まで、一貫して観音信仰の徒であったことが『尊意伝』には明白に記されている。

母年至三十五。曾無子息。自以無兒。語有縁僧。々即答云。

求子之人。當念觀音。必得端正之男女為。母聞此告。且夕祈請。貞觀七年歲次乙酉。母見奇夢。(中略)夢覺之後。不知祥瑞。經月之間。身有妊娠。

出生において母が觀音に祈請し、夢告があつて得た子だとするものである。言うまでもなくこのことは、天神が十一面觀の垂迹であり、道真が長谷の觀音の化現として父菅原是善の家の南庭に出現すると、軌を一にしている。尊意は、出生だけではなく、十七の歳粉河寺からの歸りに立ち寄つた河内国若江寺で、白心木の枝を切り取つて山に歸り、それをもつて千手觀音を造り、一生の持仏としたこと、臨終にあつては、弟子に告げて觀音に歸依することと二心なき由を言い、千手陀羅尼の加持を誦して欲しいと頼むなど、常にその背景に觀音信仰をもつた人物なのである。尊意と道真、より詳しくいえば天神緣起の中の怨靈道真とそれを鎮める尊意との間の共通項は、この点に求められるだと考える。このことによつて天神緣起の中の尊意の存在は何の矛盾もなく位置づけられることになるのである。

ところでその共通項をより強く打ち出そうと志向するものが、先にみた安樂寺本系の尊意の法力靈驗譚の増補部分なのである。建久本では緣起末尾に天神が觀音の垂迹であることを説くのが、具体的に觀音について言及する唯一の箇所であるのに対して、安樂寺本系の該箇所では、よりはっきりと觀音について述べる。法性房渡河の段の後、尊意の加持が効を奏したことを記して「觀音御利生。無人多損事。」と添えるのである。さらに觀音信仰の影響

は、この記述にだけ見えるのではない。『法華經』觀音品に「若有持是。觀世音菩薩名者。設入大火。火不能燒。由是菩薩。威神力故。若為水所漂。称其名号。即得淺処。」とあるように、この「法性房尊意鴨河渡河」という靈驗談全体は、觀音を信奉する者は水火の難を免れるという信仰から發生したひとつの説話なのである。本来は、觀音信仰にまつわる、尊意を軸とする独立した唱導として、おこなわれた可能性もあろう。されば、この段は、觀音信仰を基調とした尊意個人の靈驗談が、天神緣起とは別のところで生成され、伝承される中で大きくふくらみ、前述したような事情で尊意と道真とが結びついた時、天神緣起の中に取り込まれていったと推せられよう。安樂寺本系で建久本に較べて著しい増補がみられる理由は、増補された形での説話を取り込んだか或いは安樂寺本系緣起の編者が、尊意についての説話を増補しようとする意志のはたらく位置にあつたか、いずれかの問題に帰せられよう。どちらにせよ、尊意説話の伝承と安樂寺本系緣起編者の距離は、非常に近いものと考えざるを得ない。

尊意に関する説話は、それではいつごろどのようにして成立してきたものであろうか。天神と関わる尊意の記録をさかのぼれば、ほぼその見当がつこう。『尊意伝』の中で尊意が天神と関わるのは延長八年六月二十六日の清涼殿落雷の時である。この時尊意は禁中に百日伺候して、天皇を加持し、延喜帝の夢にその声が届いて不動明王の火災を免れることができた、『尊意伝』は記す。尊意が道真の御霊を鎮めるといふ緣起にみられる発想の源点

のひとつが、ここからうかがえるのであるが、『尊意伝』にあつてはまだ法性房渡河の靈驗説話はみられない。この後、『日本紀略』『扶桑略記』は『尊意伝』のこの部分をひいて記述するのであり、それらの姿勢は以後の史書にあつても同様である。ところが『元享積書』まで時代が下ると、そこに変化が生じてくる。

『元享積書』は延長八年の落雷と尊意による加持の記事を記した後、すぐに延喜帝の夢の記事を載せず、かわりに、天神縁起にあるふたつの説話、道真が都に害をなす前に、比叡山にいる尊意のもとを訪れて宣旨に応えぬよう求めたという、いわゆる柘榴天神の説話と、法性房渡河説話を載せるのである。そのうち法性房渡河の部分を引き、^④「己而雷雨決旬。鴨河大漲。人馬不通。於是乎詔意赴宮。意車到河濱。激浪止流水濕輪。」となる。短い記述ではあるが、この部分が安楽寺本系の縁起からきていることは疑いえない。そしてその後、延喜帝の夢の記事を載せるのである。つまり『元享積書』は、『尊意伝』以降の史書の記述と天神縁起の尊意説話、それも安楽寺本系のように増補された形のものと一緒に合わせて、その記事を成しているのである。安楽寺本系縁起の成立した時期については、その年代を確定することは現在まだできないが、尊意説話の増補から、建久本の成立から『元享積書』に先立つ範囲の中でおさえることができるであろう。

そしてその尊意説話は、既にみたように天台座主法性房尊意の、有験の僧としての法力を強調する方向へと、またそのことによって天台宗の立場を強調する方向へとふくらんでいったのであ

った。そこで、そうした説話の伝承を支えるのは、どのような人々であつたらうか。

二二

尊意説話の伝承を考えるために、近年の今成元昭氏の論考を手がかりとしたい。氏は、「惠亮破腦・尊意振劍」の成句の成立を中心に、尊意の周辺の状況を論じられた。その中で氏は、「尊意振劍」の句が、天台宗寺門派で称揚する尊意の靈驗談をふまえて成つたものであり、^⑤それは山門の靈驗談に対抗するものとして寺門派の人々の手によって編み出され広められたこと、山門側がそれを「慈覚門徒」尊意の話として取り込み寺門色による尊意談の浸透を防ぐとともに、よりスケールの大きい山門靈驗談への展開を企つたことにより惠亮と一対を成す成句ができたとの見解を示されたのである。本稿でこれまで天神縁起の法性房渡河の説話までを「尊意振劍」について氏の言う「尊意の靈驗談」に含めてよいかについては、なお疑義が残るのでにわかには首肯できないが、十三世紀初頭の山門寺門対立の状況の中で、尊意という人物に様々の靈驗談が付着され伝承がふとっていったらうことは、充分考えられることである。特に第九世の長意を例外として、八世康済から寺門側がその座を占めてきた天台座主職が、十三世尊意を最後として山門側に移ること、その尊意は『天台座主記』にみられるように慈覚門徒でありながら『尊意伝』に記されるように

智証や、その門徒の猷憲と深く係わった人物であることを考えあわせれば、山門側が尊意の説話を取り込み、さらにその説話を増幅していく可能性はたいへん大きい。安楽寺本系縁起の尊意説話も、そのような中で増幅されて伝承されたものが、入り込んだものと考えることができよう。その伝承をふくらませ定着させるにあたっては、『神道集』巻九にも明らかのように、安居院流に代表される天台の唱導家達が関与していることも推測できよう。

安楽寺本系天神縁起の成立に天台宗が深く関わっていたのであろうことは、ひとつの見通しとして、これまでも諸氏によって言及されてきた^②。尊意説話を検討することによって、「縁起」に較べ安楽寺本系が、尊意に関する伝承を大きく取り込んだ縁起であり、その伝承は天台宗の内部で増幅されたと推せられることをみてきた。そこでこのような縁起の存在を北野社の側からみればどうなるかについて、最後にふれねばなるまい。「縁起」と安楽寺本系との違いはまた、その形態としては絵を伴うかどうかの問題ともなる。承久本以降、絵を伴い絵巻きの形式をとった縁起と、安楽寺本系の縁起とはその機能（それはおおむね享受のされ方と言い換えられようが）の異なってくるのが考えられる。承久本において法性房渡河の段の説明の役をほとんど、それに付された絵が担っていることは、その典型的な例である。承久本ではこの部分の詞章が大きく絵によりかかっているのに対して、絵を用いず詞章のみで、それを聴聞する者の心を動かそうとするならば、安楽寺本系縁起のようにより増補された内容によって享受者の

関心をひきとめておく必要があったであろう。言い換えれば、安楽寺本系は、絵をもたずに自立した本文をもっていることになる。しかもその両者の縁起が、はじめに述べたように北野社及びその周辺にあって並存関係にあったことは、北野社自身が、両者を使い分けていたことをうかがわせる。「聞書」は、絵を伴う縁起の詞章に、絵を伴わない縁起の詞章を注として用いているのであった。この「聞書」が次に用いられる場合には、いわゆる絵解きのようにして、安楽寺本系の詞章が用いられることは想像に難くない。天台唱導の影響下に成立し、唱導色を色濃くもちつつ、「縁起」から独立しながら、絵巻の補完的な役割をも果たし得る縁起、安楽寺本系天神縁起のもつ性格をそのように規定できると考える。そのような縁起の出現をうながした要因として、承久の乱から文永・弘安の役の前後にかけての政治変動と思潮の変化、それに敏感に反応したであろう北野社と、そこに縁起を求めて集まる北野信仰の徒を、現在のところ仮に想定しているのであるが、それは今後の課題として置くこととする。

注① 「北野天神縁起絵巻詞書(校刊)」『美術史研究』126号。昭17。

② 「重要文化財天満宮縁起について(下)」太宰府天満宮社報『飛梅』58号。昭56。太宰府天満宮独自の靈驗利生譚などを載せる縁起である由紹介されている。

③ 村上学「神道集巻第九『北野天神事』ノート」(一)『名古屋大学国語国文学』15・17号。昭39・40。

松本隆信「中世における本地物の研究」(一)～(五)『斯道文庫論集』九一十六。昭46)54。

④ 本稿のもとになった説話伝承学会六十年例会(昭和六十年五月。於同志社大学)での口頭発表の席上、村上学氏に、絵のついた安楽寺本系縁起を見たことを教えられたが、所在を確認できず未見である。

⑤ 明治四十二年国学院大学出版部刊。

⑥ 主に安楽寺本系の本文に拠りながら、甲類本の本文を混入していることが村上氏注③論文で明らかにされている。

⑦ 同注③⑥

⑧ 建久本の引用は『日本思想大系 20・寺社縁起』(岩波書店)による。以下同じ。

⑨ 源豊宗「承久本北野天神縁起絵巻の詞書について」『仏教芸術』16号。昭27。

⑩ 梅津次郎「正嘉本天神縁起絵巻に就いて」『国華』779号。昭32。

近藤喜博「弘安本天神縁起成立の前後」上・下『国華』797・798号。昭33。

⑪ 同注⑩

⑫ 『天神縁起の歴史』雄山閣。昭48。

⑬ 『統群書類従』第三輯下所収。

⑭ 『統群書類従』第八輯所収。

⑮ 『群書解題』による。

⑯ 岩波文庫版『法華経』による。

⑰ 『日本仏教全書』所収本による。

⑱ 『「惠亮破脳・尊意振剣」の成句をめぐって』(一)『立正大学人文研究所紀要』

⑲ 「尊意振剣」については、今成氏も⑳ 論文の中で述べているように、具体的にどのような説話内容をふまえているのか、対応する説話がまだ発見されていない。私見では、尊意説話と天神縁起との交渉の中で、『大鏡』以来、藤原時平に関して伝えられてきた、彼が剣を抜き放って天神を一喝したという話との混同があるのではないかと考える。尊意を称揚する安楽寺本系で「本院大臣責道理高声御坐。真実遮火炎眼。抜耳根不聞物程成・抛捨太刀合掌。唯観音観音計被仰。」と、時平についての描写が微妙に変化しているのもその例証とみるが、未だ仮説の域を出ない。

㉑ 注一③、注二⑧など。

㉒ 統群書類従所収本が、内容的には太宰府に近寄ってはいないにもかかわらず、「鎮西安楽寺本云々」と入れた増補本であること、それが太宰府天満宮から京都北野社への要請に基づくものであるとすれば、それがどのようなことを意図した要請であるかを解くものも、この時期にあるのではないかと考える。

(こなか・とおる 聖母学院中高等学校)